

花

井本元義

老いた私に残されたのは
一輪の牡丹を愛でることだけであった
純白の花弁は感情を出さない
寡黙で気位の高い女性であった
それは日によつてさままな光に映える
ふくよかな盛装した女性であった
花は匂わず瞳は冷たく深いはずだったが
視線を合わせようとしないのでわからない
だが初夏の風のないある朝突然に
大輪の花弁が一気に堕ちて散った
必死の瞬間を決心して
悲痛な形相でわざと醜く不器用に地面を打った
それは自己へ向けての怒りの破壊に思われた
美しくあるということに宿命づけられ

自己の美しさに耐えられず
その束縛からの自由への余りに激しい希求が
叶えられない焦燥に思われた
己の存在からの解放を願っていたのだ
苛立ちは怒りから悲しみにかわり
悲しみの極みはもはや何も語らず
むしろ黄ばみ萎れ
地虫に食いちぎられるのを選んだのだ

あるいは私の凝視を厭う侮蔑だったのか
私の老残への嘲笑だったのか
私はすました顔をして耐えねばならない
私もう美しいものを愛することを止めようと思う
そして己の存在を見つめねばならない
私は存在に耐えて行かねばならない
はたして私には解放される必要があるのか
怒りも悲しみもあきらめもいらぬ
言葉はいらぬ その時には
自己の存在の中で静かに完結すればよい